
けいおん！～拝啓 前世の家族へ～

あなか15号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！〜拝啓 前世の家族へ〜

【Nコード】

N1368T

【作者名】

あなか15号

【あらすじ】

けいおん！の世界に転生。

公園で妹を脅かそうと考えていたら、そこにとっても絵になる女の子が！！もう〜一目ぼれです！！！！

(前書き)

自分も書いてみたいなあ〜と思い投稿しました。ちなみ完全にあな
か15号の自己満足です(汗)

初めまして、こんにちは。いきなりですが、私は二次小説でよくある転生者です。

いきなりこんなこと言われても、正直「え？何言つてのこいつ？」
って思われるかもしれませんが……事実なんですよ。

それを証拠に目をつぶれば前世の記憶がありありと脳裏に焼き付くんです。

私は、三兄弟の長男でした。よく次男と喧嘩して羽交い絞めにされたり、三男にプロレス技の実験台になったり、弟たちに悪戯して仕返しにボディーブロー食らったり……

あれ？なんか弟たちにボコボコにされた記憶しかな思い浮かばない

……

オホン！！と……とにかく、私は前世の記憶があるのですよ。

それに気づいたのは小学1年のころです。私が双子の妹と公園で遊ぶ約束し、先に行つて待つていました。そこにはブランコに乗つて本を読んでいる女の子がいました。

ちよつと昔話……

「わあ……」

その女の子を見た私は……僕は心を奪われました。一目ぼれとはまさにこのこと。その女の子はとても絵になっていて、僕は彼女に見られていた。

「…………ゴクリ」

話しかけようか、かけないか……僕は迷っていました。綺麗な彼女をもっと見ていたい、けど話しかけたい、そしてお友達になりたい。

「…………よしー」

僕は胸をドキドキさせながら、一步一步彼女に近づく。けど、近づくことに不安が過る。無視されたらどうしよう……なんて話しかければいいんだろ……ちゃんと話せるのか……

こういうとき、妹は何の不安もなく話しかけることができるのだろう。アイツ、どうしてこんな時にいないんだ！いつも可愛らしく僕の傍にいるのに！！……って僕が先に家を出てきちゃったのが原因なのだが……

「ん？」

「ひよー！！！」

彼女は僕に気づき視線を本から外し、僕を見ていた。そして目が合い、僕は思わず変な声を上げてしまう。

「…………え……えつと……」

な……何か話掛けなければ！！えつと、まずはあいさつから言って、それから……そのあとは……ああああ！！

つて！！なんか彼女どんどん怯えた表情になってるんですけど！！怖がつてる！！いきり近づいてきたから怖がつてるよ！！！！なにか！！なにか話しかけねば！！

「な……何の本読んでるの!!」
「ひっ!!」

しまったああ!! 緊張しすぎて声が大きくなっちゃったああ!! そして、余計怖がらせちゃったよ!! ああ、なんか小刻みに震えてるよ…なんか子リスみたいで可愛い…って僕は何を考えてるんだ!!

「ご…ごめんね! いきなり、大声だして。なんの本読んでるか気になっちゃって…」

「ヒック…うう…」

「ぼ…僕本好きなんだ。だから、気になりすぎて興奮しちゃって…」
「……え? ……ご本……好きなの??」

「え! ……ううん!! 大好きだよ!! もう毎日読んでるよ!!」

嘘は言ってない。うん、嘘言ってない。漫画も立派な本です。

「そう…なんだ」

「うん。そうなんだ!」

ふう…なんとか最悪の危機は回避してみた。怯えた顔が少しだけ和らいでいる。ちょっと嬉しそうにもみえる。
これは行けるかも。

「それで、どんな本なの?」

「うん…これだよ」

彼女は一旦本を閉じ、俺に表紙を見せてくれた。その本は絵本でタイトルは……

「『ぐりとぐらとくるりくら』?」

「うん。パパとママに初めて買ってもらったご本なの。すっごくおもしろいの！」

彼女は嬉しそうに本を抱きしめた。それと同時に笑顔がこぼれる。なんて可愛い笑顔なんだ……

「読んだことある？」

「えっと……その本は読んだこと……??？」

あれ??なんだろう……読んだことないのに……ものすごく見覚えある。どうしてだろう。どこで見たんだろう。

「……どうしたの？」

「え！いや、なんでもないよ……ごめん。僕その本読んだことないや」

「……そっか……」

彼女はちよつと残念そうな顔をした。そんな顔も可愛いと思っただが……そんなことより、そんなことよりも！！このモヤモヤはなんだ！……！

どこで見た。家？妹の部屋？お父さんの部屋？教室？学校の図書室？友達の家？

「じ……じゃあ。読んでみる？面白いよ」

「んん??……え?いいの?」

「うん!いいよ」

嬉しそうに僕に本渡す。やっぱり可愛い……じゃなくて!!

読めば何かわかるかも。そう思い、僕は本を受け取る。

絵本だけあってページ数が少ないから、すぐに読める。絵本だし、サツと。

「……………」

サツと読む。そのつもりだった。

「……………」

けど、僕は「文字」「文字」、丁寧に読んでいく。

「……………」

ページをめくる度に、「この本を見たことがある」「という信憑性が高くなっていく。

僕は……この本を。

「……………」

僕は……俺は……

「……………」

「え……！ど……どっしたの？」

俺は……

この本を知っている。そして、俺はすべてを思い出した。

「ど……どっ……泣いてるの？」

「えっ？」

どうやらいつの間にか泣いていたらしい。そういえば、あの頃も涙腺弱かったなあ〜。

「だ…大丈夫??」

「うん。大丈夫だよ！あはは、面白すぎて涙出てきちゃったよ！！」

「え？泣くほど面白かったの??面白いと泣いちゃうの??」

「そうだよ。面白いと泣いちゃうんだよ!!」

すべて思い出した。あの頃の…前世の記憶を。

俺が三兄弟の長男であること。兄弟仲良かったこと。自分がゲーム・漫画・アニメが大好きだったこと。高校1年から彼女できなかったこと。現役に一流大学だけ受けまくって落ちて一浪したこと。弟2人はリア充だったこと。就職が中々できなかったこと。そして…就職決まってすぐの23歳で死んだこと。

「クスッ。面白いと泣いちゃうなんて変なの」

「ええ〜そうかなあ〜?」

「フッフ」

やべ〜やっぱ笑うとめっちゃ可愛い。ちょっとシリアスな展開だったけど、そんなのどうでもよくなるくらい可愛い。前世のことを考えるとなんか変態っぽいけど、そんなのどうでもいい。前世もなかなかの変態だったからな。ロリじゃなかったけど…

「そんなに面白かったのなら、そのご本貸してあげるよ」

「え?けど、この本大切なものなんでしょ??」

「うん。そうだよ」

「んじゃ〜駄目だよ。大切なものを他人に貸しちゃだめなんだよ?」

「え?そうなの?」

「そうなの」

大切なものは、大切に自分で持つておかないと。

「それじゃ、また明日今度は違う本持つてくるね！まだ面白いご本
いっぱいあるから！」

ワクワクとした表情で言った。ついさっきまで怯えていたのに。

「わかった！それじゃ明日同じ時間で公園に待ち合わせね！！」
「うん！！」

彼女はブランコから降り、「またね」と言っで公園の出口へ向かっ
た。

出口で彼女はこちらに振り返り、笑顔で手を振ってくれた。俺もそ
れを笑顔で手を振っでかえした。彼女は満了した表情で公園から出
て行った。

「ふう〜」

俺は小さく息を吐く。

まさか、自分が前世の記憶を持つていたなんて。てか、こういうの
っで死んだときに神様が出てきて「ごめん。ミスっで殺しちゃった」
というのじゃないの？？そしてチートな能力を2〜3個もらっで、
原作ブレイク！！とかやっっちゃうだと思っただけだ…

「てか、俺っで結構冷静だな…。前世の記憶があるっで中々怖いは
ずなのに…」

まあ〜思い出したときは胸の中がこみあげてくるものを感じました
よ。泣いちゃったし。てか、大声で泣きたかった。

『お〜い！！にいくちゃ〜ん！！』
「ん？」

どうやら我が妹が来たようだ。いつも元気な妹だ。まるで前世の弟たちみたいだな。

……あいつら、元気かな

「兄ちゃん！どうして先行くんだよ！！待っててって言ったじゃん！！！」

「先に行つて遊び場所を取つておこうと思つたんだよ」

ホントはお前を脅かそうとしたんだけどね。

「え？そうなの？…つて兄ちゃん、目赤いよ？？どうしたの？」

「フ…過去を振り返つてたのさ」

「何言つての？兄ちゃん？？」

「そんなことより！！我が妹よ！！！！何して遊ぶ！！！！」

「えつとねえ！！えつとねえ〜！！！！」

俺と妹はお母さんが迎えに来るまで、ちよ〜遊んだ！！

怒られたけど……

とまあ、こんな感じで前世の記憶を思い出したわけです。

そのあといろいろ戸惑いはありましたが、楽しく現世を過ごしていきます。あの可愛い女の子とはなぜか妹と一緒に家に現れ、びっくりドッキリしたり（なんか無理やり連れてこられたらしい）、実は同じ学校の子だったり、僕を女の子と勘違いしたり（確かに妹と似て

るけどさ、双子だし）、彼女が作文発表するのが嫌で公園で僕に泣きついてきたり（あれはキュン死ぬかと思った）、その作文がメルヘンチックだったり、妹が彼女に相手に舐められないための秘訣を教えたり……中学に入ってから3人でお花見したり、お祭りいたり、花火したり、映画行ったり、そうそう！妹がバンドやるうなんて言い出したり、3人同じ高校しようと一緒に高校選びをし、妹が必死に勉強したり、俺と彼女は勉強を教えたり……そして見事3人同じ高校に合格しお互い喜び合ったりした。

「ふんふんふん」

俺は鼻歌を歌いながら、愛用のギター・ESPホライズンシリーズのメンテナンスをしている。

高かったんだよねえ〜これ……めっちゃ高かった。死ぬほど金貯めましたマジで。欲しいものを我慢して我慢して……うううう！！ホントつらかった！！

「よし！！完璧！！！！」

メンテナンス完了。新品みたいに綺麗だ。もうあれだね、メンテはプロレベル行ってるね。

あ、ちなみにギターのレベルも相当いってますよ？自分で言うのなんです、めっちゃ上手いですよ。キラン！！

「兄貴い〜〜〜！！もう行くよお〜〜！！」

おっと、我が妹が呼んでるぜ。入学式早々、遅刻するわけにいないな。

「じゃな、相棒。行ってくるぜ！！」

愛用のギターに一言行つて部屋をでる。この光景を見たら「ちよつとお前変じゃね?」的に思われかねないが、自分の部屋だから問題なし!!!

「今日から高校かあゝ」

前世を合わせると2回目の高校生活。

「悪い。待たせた」

「まったく、遅刻したらどうするんだよ、兄貴」

「また、ギターのメンテナンスしてたんだろ? 慶はホントにギター大切にしてるよな」

「当たり前だろゝ、アイツは俺の相棒なんだからな! 大切にしないわけないよ」

前世の高校生活は最高に楽しかった。だから、ここでも…

「んじゃ、ギターオタクも来たことだし行きますか」

「クスッ、そうだな」

「おいおい、なんだよギターオタクって……」

俺の前を歩き出す2人。

「あ、そうだ二人とも」

「ん?」

「なに?」

俺は思い出したように前を歩く2人を呼び止め、そして言った。

「楽しい高校生活にしようぜ！！律！漣！」

「ああ〜そうだな！」

「あつたりまえじゃん！！3人いればいつだって楽しいって！！！」

俺は二人の間に入り、並んで歩き出す。

いつも元気な双子の妹、田井中律。

幼馴染にして俺の初恋の相手、秋山漣。（現在もホの字です）

そして、俺

前世の記憶を持ち、『けいおん！』の世界の転生者、田井中慶。

「さてさて、放課後のティータイムが楽しみですなあ〜」

「ん？何か言ったか？兄貴？」

「放課後が何？」

「いや、放課後にドーナツ食べたいなあ〜って思ってさ」

「好きだねえ〜ドーナツ」

「クスツ。じゃ〜いつもの放課後にドーナツ屋行こうよ」

「賛成！！」

そういつて俺たち三人は笑い出す。

これから楽しいことがあると思うと、俺たちは笑わずにはいられなかった。

拝啓、前世の家族へ

おれは、この世界で楽しく生きています。

そしてこれからも楽しく生きていきます。

この大好きな『けいおん』の世界で……

(後書き)

最後まで読んでくださり、あなか15号の自己満足にお付き合いくださり、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1368t/>

けいおん！～拝啓 前世の家族へ～

2011年6月3日05時07分発行